

| | | |
|--|----------------------------|----------------|
| 国際サーカス村通信 Vol.21 No.02 | | 2016年11月11日(金) |
| | | 文責 西田 敬一 |
| 編集 NPO 法人国際サーカス村協会 | 〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1 | |
| Tel 0277-70-5010 Fax 0277-97-3688 http://www.circus-mura.net k-nishida@accircus.com | | |

●平成27年度事業報告

サーカス学校開校15年目にあたる本年度に、長野県佐久市で行われた“キッズサーキット IN SAKU ”という、佐久市の子供向けフェスティバルに参加できたことは、大きな成果であった。サーカス学校在校生及び数名の卒業生に参加してもらうとともに、長い間使っていなかった空中芸用のトラスを建てての公演は、今後の公演にひとつの大きな可能性をもたらしたといえる。とはいえ、このトラスを必要とする芸を学んでいる在校生がいないのは残念である。

本人が学ぶ気持ちがない以上は、それは強要できない。ここは空中芸を希望する生徒の入学を望むのみである。

また“サーカスはリヤカーに乗って”は、多くの方々のご支援をいただき、幟に“足尾から沖縄まで”と書いた、その足尾、そして多くの会員の方々のご支援をいただき、なんとか沖縄、辺野古・高江までの旅を行うことができたが、3月の沖縄は、現在の高江で行われている抗議行動、それに対する警察の弾圧行為もなく、いたって静かであったので、パフォーマンスはできたものの、基地に反対する人々の支援になったかどうかを考えると、いささか忸怩たるものがある。しかし、原発反対、基地反対そしてますます強権的な権力を行使する安倍内閣に反対する立場を、僕らは続けていこう。

経営的には、昨年度はかなりの赤字を出してしまい、より積極的に公演などしていかなければならないと思いついた活動したこともあって、本年度分としては約5万円の赤字に抑えることができた。ただ、赤字が出たのも事実なので、この解消については来年度も引続き、校外活動を含めて、でき得る手段を講じていく必要がある。

今年はなんとかもう少し新生が増えたいと思っていたが、残念ながら、これは実現できなかった。来年度に期待したい。

●平成28年度事業計画

現在の協会の最大の問題は、やはりサーカス学校入学生が少ないことである。現在、来春入学を希望しているものは、男女各1名である。

この入学生を増やす方法としては、一つには、体験入学の希望者のために、そのチャンスを増やすこと。これには、ナージャ先生の協力が欠かせない。というのも、高校生あるいは働いている人たちの場合、どうしても、平日の体験は時間的に制約が多すぎるのである。

これまで、できる限り、平日に体験してもらおうようにしていたが、ここは、土・日曜日の体験入学をやるようにしていかなければならないだろう。

また、サーカス学校のPRもほとんどしていないので、こちらも手を打つ必要があるだろう。そのためには、HPの充実や入学案内の配布などを考える必要があるだろう。

また、校外公演活動もチャンスを捉えて増やすようにしていきたい。そのためには卒業生の協力も必要になってくるので、卒業生とのコミュニケーションをより積極的に行っていきたい。

どちらかという来者は拒まず去る者は追わずといったスタンスで、学校の運営に当たっていたが、もう少し積極的に新入生の勧誘をしていきたい。

校外活動については、来年度はすでにくつかの依頼があるが、時期が問題で、サーカス学校の夏休み、冬休みに当たるのを、どのように解決していくかである。これまでは、その時期のものはすぐに断っていたが、やれる方法を模索する必要があるだろう。

さらに、今年度の事業計画というだけではなく、より長い目で見たサーカス学校公演、さらには、サーカス団のようなかたちでのサーカスショーも模索していきたい。

●総会のご案内

期日 平成28年11月28日(月)午後5時～

場所 国際サーカス村東京事務局

渋谷区千駄ヶ谷 3-28-5 コーポ葵 402 TEL 03-3403-0561

議題

1)平成27年度事業報告・会計報告

2)平成28年度事業計画

3)役員人事

※同封のハガキにてご出欠をご連絡いただきますようお願いいたします。

●サーカスってなんだ？ (西田敬一)

前号で、新たな空間としてのサーカス学校という提案というか考え方を少しばかり述べさせてもらった。そして、サーカス学校がサーカス技を身につける場であると同時に、そこにはサーカスについての従来の考え方、その束縛から解放される場として、いくらかは機能しているのではないかと書いた。

この、これまでのサーカスについての考え方から距離を置いて、サーカスとはなんだという問いかけは簡単ではないが、自分が考えている、いささかカビ臭くなっているサーカスの考えを見つめ直すには、そんな大上段に構えてみるのも悪くないかもしれない。

ポイントはそのように問いかけることで、これからの活動の指針のようなものを浮かび上がらせることができると思うからである。

*

約40年ほど前、今はなき関根サーカスにサーカスとはなんぞやと興味を持って通い始め、団長からいろいろと話を聞きながら、サーカス興行のイロハの実践指導を受けていた、あの時代。当時の日本でのサーカスとはなんぞやという世の中の一般的な見方は、時代遅れの、消えてしまいそうな大衆芸能の一つというものではなかったかと思う。

僕にしても、たまたま静岡の護国神社にかかっている関根サーカスのテントを見たときの驚きは、へえ～、まだ生き残っているんだという感じであった。と同時に、まだ生き残っている不思議さに惹かれて、その後、度々押しかけて団長の話しを聞いているうちに、ズルズルとその世界にはまり込んでしまったのである。

しかし当時は、サーカス芸そのものに強く惹かれるというよりも、公演が行われる大テントの後ろに建てられている寝小屋という長いテントを仕切って宿泊場所になっているサーカス団員たちの屈託のない、賑

やかな生活に、当時の世の中の流れとは異なる共同体を見る思いがしたのかもしれない。もちろん、そこにはその様な問題もあったが。

そんなサーカス世界にはまったにもかかわらず、僕にはサーカスの人にはなりきれなかった。同じようなショーを続けるというサーカス公演のやり方に、演劇をかじっていた僕には納得がいかなかったのだが、サーカスのアク트는そう簡単に変更できるものではなく、また、日々公演を続けているのだから、新しい芸を覚える時間が十分にあるわけではないし、サーカス芸を身につけている芸人さんたちが世の中に大勢いたわけではない。当時、サーカス団同士で芸人さんをトレードするなどといったことは考えられないどころか、ひとつの団に所属すればその専属であり、他の団に移るとなれば、団の威信の問題になってしまうほど、大それたことであった。それだけに、新しい芸をショーの中に入れようとするれば、それぞれの団が新たな演者を育てるか、あるいはすでに活躍している芸人さんが新しい芸を覚えるしかなかった。

そんな状況がわかってくるにつけ、もちろん、他にも様々な要因があったが、僕はサーカスから足を洗うことを考え、団長に手を引くことを伝えた。団長はひと言、「他の団にはいくなよ」と、僕のわがままを聞いてくれた。その関根サーカス団はホリディサーカスと名称を変えたが、1979年に群馬県館林市での公演期間中に倒産してしまった。その後、カキヌマサーカス、矢野サーカス、そしてキグレサーカスが消えてなくなり、一方で、ほぼ海外のアーティストでショーを作っているポップサーカス、中国雑技系のスーパードリームサーカスなどが生まれているが、日本の伝統的サーカス団といえるのは、木下サーカスだけになった。

1970年代にその火が消えて無くなるのではないかと言われていた日本のサーカスは、木下サーカスが活躍しているので消えてしまったとはいえないが、なんとも残念な状況にあると言わざるをえない。

この状況は何を意味するか。木下サーカスと現在活動しているサーカスと消えてなくなったサーカスの大きな違いは、やはりその経営の手腕にあったのではないか。近代的な経営の仕方をうまく取り入れることができなかつた、どこか古い、当たる時もあれば外れる時もあるといった、興行は水物といった意識が残っていたサーカス団が潰れていったのではないか。もちろん、他にさまざまな要因もあるだろう。特に、サーカスの芸人さんというかパフォーマーをどの団も育てえなかつたことは大きいし、公演のために借りる場所が少なくなっていることなどもあげられる。

だが、何よりも経営の手法であり、サーカスのパフォーマーをそれぞれの団の専属としてかかえるのではなく、一つのショーを作るための契約パフォーマーとしてみる、つまりショービジネスとして捉えることができなかつた団が解散に追い込まれたのではないか。その点、木下サーカスは二代目社長であった故木下光三氏がサーカスはショービジネスであるという考え方から、業界に先駆けて近代的な経営手法を取り入れ、その手法が現社長まで引き継がれていることが、今日の、言ってみれば日本のサーカス界で一人勝ちの地位を築いたといえるかもしれない。

*

サーカスはつまるところショービジネスである。ポリショイサーカス、シルク・ドゥ・ソレイユが日本で長年にわたって公演し続けているのも、確かにその運営というか経営的に成功しているからである。

だが、そうしたサーカスだけがサーカスではない。

最近日本でもかなり知られるようになってきた、ヌーボー・シルクと言われる、フランス発祥のアートサーカスの流れがある。この流れのサーカスはどこかが一人勝ちしているというのではなく、さまざまなグループがあり、また個人で活躍している人々もいる。ヨーロッパ各地始めオーストラリアなどにヌーボー、つまり新しいコンセプトのもとにショーを作っているサーカス団と云っていい組織が生まれている。

そしてそうしたショーを見て、自分もサーカスをやってみたいという若者が各国のサーカス学校に通い始め、彼らがまた自分たちのサーカスショーを作り出すようになっていく。この世界的な流れは、しかし、

日本ではまだ大きな動きとはなっていないが、サーカスをやりたい若者は増えているし、事実、海外のサーカス学校やサーカス団で活躍している日本人パフォーマーは出てきている。しかし、自分たちでグループを組んだり新しいサーカス団を結成する人々が、なぜ、日本に誕生しないのだろうか。もちろん、サーカスの大テントを用意してサーカス公演をするには相当の資金がいるし、またサーカス業界そのものがそうしたサーカス団が生まれることを望んでいない状況があることも影響しているにちがいないが、なによりも思い当たるのは、どんなサーカスショーを作りたいのか、公演を行いたいのか、そのコンセプトを明確に作りだしている声が聞こえてこないことだ。それはなぜなのだろうか。

僕自身は、いうまでもなく古いサーカスのイメージに相当に強く束縛されているところがあり、サーカス団を立ち上げ公演するのであれば、やはり飛行の空中ブランコができるだけのテントを用意したいし、そこで行われるショーには、従来のサーカス的演目が欠かせないと考えてしまう。最近ではこの考えは捨てなければいけないと自分に言い聞かせているが、ここ10年ぐらひは、自分には新しいコンセプトを持ったサーカスグループを立ち上げることは無理であり、そこには手を出さないほうがいいのではないかと、正直悶々としていた。その気持ちを晴らすためでもないが、演劇的なサーカスショーとして、負け相撲を扱った『勝ってたまるか、剣振丸』やさまざまなダンスグループと一緒に、今年、あの、バンクシーの“ディズマーパーク”から発想した『ディズマーダンス』などを作ったりしているが、そうした作品を作る上でそれぞれのコンセプトがあるとはいえ、それらの作品は、現在の日本のサーカスの世界に向けてチャレンジした作品とは言いがたい。たとえそれもまたサーカスの世界での活動と自分なりに考えても、新しいサーカスを作ろうという想い、そのために自分たちのコンセプトを構築しようとして、仲間を募って作った作品ではないからだ。あるいは、やはり古いサーカスの世界から抜け出せない僕は、どこまでも遠回りをして、その途上の何もなくてくたぼってしまうのかもしれない。そんな情景を俯瞰図のように見れば、後方はるか彼方の灰色の世界に、ボロボロになった大テントが風に揺れていて、またはるか前方には、周囲をオスプレイやさまざまな爆撃機や戦闘機が飛来する基地が守る大都会から一本の綱を張り、抜け出してくる、綱渡り師の姿がまぶたにちらついたものの、ついに意識を失い、現代科学が疲弊させてしまった廃土の地面にうつぶせてしまった、老人の姿である。というのも、なんとも情けないのだが、、、。

<クロワッサン・サーカスが行く>



そう、そこは、草ぼうぼうのなにもない空間であった。千三百年ほど前に、都のあった平城京跡地。これからも、後一千年以上、このままであって欲しい草の大地。観光資源などといって、平城京を摸した都などまかり間違っても作ってくれるなよと思った、この場所に、リーダーの松本雄吉さんが亡くなり、最終公演と銘打たれた維新派の芝居『アマハラ』が演じられた。

そしてこの公演と同時に開催された、維新派の面々とその仲間たちが作り上げた屋台村の中央に、クロワッサン・サーカス団の空中ブランコ用のトラス(構造物)が夜空を天幕として建てられていた。

夜の8時20分過ぎ、このサーカス団の団長清水恒男氏と楽隊の面々、パフォーマーたちの30分弱の短い公演は、それこそあつという間に終わってしまったが、そこに、僕は今の時代の新しいサーカスの息吹を感じてい

た。清水氏はトラスだけではなく、小さなテントをもすでに用意している。屋台村ではテントを張っていないが、静岡大道芸ではテントも建てている。

なぜ、彼らのショーに、新しいサーカスの息吹を感じるか。それはなによりも、清水氏が古い大サーカスのイメージにとらわれることなく、できるところから実際にサーカスそのものと言っていいサーカス公演を行い、一座を結成しているからだ。彼自身、綱(ワイヤー)渡りのパフォーマーであり、その綱(ワイヤー)を張るという作業を行ってきているので、テントにしろトラスにしろ、仲間たちと一緒に作ることを厭わないどころかそこに喜びを感じている。その彼の態度、感性は、すでにれっきとしたサーカス人の気質を物語っている。サーカス人の匂いを僕は感じとっているといってもいい。それと、今までここに書いてきているコンセプトの意味とは違うといえば確かに違うのだが、彼の場合はサーカスショーを行う上でコンセプトを必要としているわけではない。あえていえば綱を張りテントを建てトラスを建てることそのものが彼のサーカスのコンセプトそのものなのである。因みにこのクロワッサン一座には、サーカス学校出身の田中健太君が参加しているし、学校の夏休み期間には、在校生の吉川健斗君もパフォーマンスをさせてもらっている。彼らが、清水氏のサーカス公演をどのように感じているかは聞いていないが、多分、ただ単にそこで自分のパフォーマンスができるからということ以上のなにかを感じているのではないか。



この屋台村の隣に、廃船を模した巨大な維新派の舞台が作られていたが、多分、清水氏は、その舞台を使って綱渡りや空中ブランコなどをやりたかったのではないか。すくなくとも、そんな夢を膨らませていたのではないか。僕自身もまた維新派の公演を見ながら、廃船をイメージしたという舞台でのサーカス公演を夢想していた。サーカスにつきものと思われている大テントがなくとも、サーカス会場は作れるし、そうしたテントではないサーカス会場はどのようなものであってもいいはずである。

そう思える以上、大テントにこだわる、僕のサーカスのイメージとは壊していくか、少なくとも大テントのないサーカスとそれがあるサーカスを並列に捉えうる感覚を養っていくべきなのだ。その一方で、維新派の舞台に空中ブランコのパフォーマーが飛行している姿を幻視するように、世界全体が廃墟化していく現代を描ける想像力を鍛えていくべきではないか。

こうした想像力を鍛え、そこに僕らのコンセプトを描き出すことで、ある種のショーを作り出すとき、“サーカスってなんだ”の問いの一つの答えがあるだろう。

●デフラクト公演評 黒瀬博靖

日本ジャグリング協会理事の黒瀬です。

私は、ジャパンジャグリングフェスティバル 2016(JJF2016)においてデフラクトのショー主催・ワークショップ参加、世田谷パブリックシアターのショー鑑賞・ワークショップ参加、とデフラクトにべったりの一週間を過ごしました。西田さんからデフラクトについて何か書いてほしいという依頼がありましたので、この期間に私から見たデフラクトについて書いてみようと思います。

デフラクトの今回の公演『フラーク』についてのデータはこちら(世田谷パブリックシアターWeb サイトより)

カンパニー デフラクト『フラーク』

【出演】ギヨーム・マルティネ エリック・ロンジュケル ダヴィッド・マイヤール

【ジャグリング】ギヨーム・マルティネ エリック・ロンジュケル

【音楽・ステージマネージャー】ダヴィッド・マイヤール

【演出】ジョアン・スワルトゥヴァゲール

【ジャグリング監修】ジェイ・ギリガン

【照明】ダヴィッド・カーニー

私が初めてデフラクトを見たのは3年前、フランスはトゥールーズでの EJC2013 でのショーでした。高い技術力に加えて面白い演出で、シャープな舞台という印象、なんだかカッコイイのですね。当時の私のメモには「まるでパズルを解いているかのよう」と書いてありました。毎年開催される JJF では、海外ジャグラーを招いてのステージショーを上演しています。日本で上演してもらおうとしたら誰がいいのかという目線でもショーを見ており、その中でデフラクトのショーも私の心の中では候補のひとつとなっております。

そして今年、世田谷パブリックシアター様と組む形で、デフラクトを JJF2016 に招聘することができました。1年以上前からデフラクトの日本公演を交渉していた(株)アフタークラウディカンパニー様にお手伝いいただき、三位一体となった公演運営となりました。デフラクトに依頼したのは、ステージショーとワークショップ！私がジャグリング協会側の契約窓口となって各種調整を行いました。

チケット販売後に演出都合で見切れ席が大量発生かも？とか、舞台上にずっといるので開場から開演までの客いれ時間を短くしてほしい、など運営する側からするとドキドキするような事態もあったのですが、公演は無事終了。

JJF 公演は客席から見えていましたが、終わった直後の感想は「何事もなく無事に終わって良かった！」エンディングのところは他の観客とはぜんぜん違った意味で、ドキドキしながら見ておりました。そして次に気になったのは観客の評価、劇場を去るジャグラーたちの何人かがデフラクトのくねくねした動作を真似しているのを見てなんだかほっとしました。まあ、このあたりでようやく平常心に近い状況に戻ってきてこの公演の中身を反芻することができました。

最初に頭に浮かんだ感想は、

「ドリフターズがジャグラーだったらこんな感じ？」

私が小さい頃に「8時だよ全員集合」で楽しんでたドタバタを、もしジャグリングでやってくれてたらこんな感じかも？と思ったわけです。そしてその後にじわじわと面白さがこみあげてきました。バナナですべる、線で転ぶ、ボールとじゃれる、床を転がる。。

身体をはったどたばたとツールとしてのジャグリング、そしてそれらの繰り返しのネタの強調、ほかばかしい笑いをとことんにいって来てたというところでしょうか。「ジャグラーが演じる吉本新喜劇」というふうに言ってもいいかもしれません。

このときになって、劇場入口にそれとなく線引いておけば、帰りに皆転んでくれたらうに！とちょっと後悔しました。

ちなみにエリックさんは日本公演のために日本語を勉強したそうで、日本語の片言で前説してくれました。日本公演を楽しみにしていたのだなと、嬉しくなりました。

翌日は JIF ゲストステージワークショップ、ギョームが大勢のジャグラーを前にボールとのかかわり方、おもしろい動きの作り方について語ってくれました。使う物はボールひとつだけ、一つの物を使ってどのようなことができるのか、やっていること自体はたいしたことないのだけれど失敗するリスクのある状況で失敗自体が味になるような動きを目指していたそうです。ダッシュして止まっておもしろくなるようにボールを投げてそして駆け戻ってくるの繰り返し。走って投げてを繰り返しているうちに心がハイになっていきましたね。参加者の皆さんも最初と最後で声の勢いがまるで違いました。私の尻は筋肉痛となりましたが、楽しい時間でした。



翌週は世田谷パブリックシアターにおける公演鑑賞、劇場構造の差による演出以外はほとんど同じ内容だったのですが、私にとって JIF 公演よりもずっと面白く感じられました。一度目では見えてないものが見えてくる、ああこんなことをしていたのか！とわかるところも多数、とくに床の転がり具合が絶品。技術を惜しげもなく使ってどたばたを見せており、笑えて凄さを味わえる「フラーク」は2度見るべきショーなのかもしれません。また観客として多数の子供たちがおり、子供たちの笑い声がとても良いアクセントになっていました。もっとも「主催」でなくなったおかげで心が軽くなっているというのが、私にとっては最大の差だったのかもしれません。何事も起きないで欲しい！と願って舞台をみると、今度は何がおきるのかな？と思って舞台を見るのは大違いです。自分自身に対する気づきもあり勉強になりました。ショーを見た直後に、このショーを見るように家族を説得するにはどうすれば？と友人に問われて、私は「ダンス好き相手ならコンテンポラリーにジャグリングが堂々混ざった凄いやつ、演劇好きなら物語をボールと体で語っている、ジャグショー好きなら凄いやつに演出でこっそりした空間、筋肉ジャグ系ならあの凄いやつ」

投げ方を真似できるかい？」と答えたのですが、うまく伝わったでしょうか。ご覧になった皆さんにもどのようにすれば面白さが伝わるのか語ってみて欲しいところです。

ギョームさんからお聞きしたのですが、ヨーロッパと日本で同じ作品を演じていても笑いのポイントが異なるのだそうです。

そのまた翌週には、今度は世田谷パブリックシアターでのワークショップに参加！

参加者の半分程度はジャグリング未経験者でしたが、JJFと同様のボール1個で音楽にあわせて身体を動かすスタイルで投げたり転がったりしているうちに、またしてもハイな状態になりました。そしてワークショップ後のギョームさんとの会話がとても興味深かったのです。

「カンパニーとしていろんな表現の仕方を探している、言葉をしゃべらなくても動きで感情みたいなものが伝えられる、そういったものを探しているのでワークショップでは参加者に制限をつけずに募集している。いろんな人が出会って一緒にやれる機会をつくりたい、だからいろんなところでワークショップをしている。ジャグリングをとおして人と繋がっていくことが大切、ジャグリングは社会と繋がるためのものになる。生まれ育ったところは生存競争がたいへんなところで、ジャグリングというのはヒップホップのようにそういう所の人たちを助けるものになる。」

ワークショップでジャグリングと社会の関わりかたについて課題をもらったようなものです。

このようにして私のデフラクトとの一週間が終わりました。ショーが素晴らしいものだったのはもちろん嬉しいことでしたが、それ以上に公演やジャグリングのあり方について考えさせられたことが私にとっては大きな収穫でした。またどこかでデフラクトのメンバーたちと語り合いたいと思っています。関係者の皆様、本当にありがとうございました。

最新 サーカス公演情報

★木下大サーカス

●宮崎公演 公演期間 2016年10月8日(土)～2016年12月5日(月)

●休演日:毎週木曜日 ●会場:宮崎市 イオンモール宮崎 特設会場 ●電話:宮崎公演事務局 TEL0985-25-0450

★ポップサーカス

●つくば公演 公演期間 2016年12月10日(土)～2017年1月29日(日)

●休演日:変則的ですので、ウェブサイト、もしくはお電話にてご確認ください。

●会場:イオンモールつくば 大テント ●電話:つくば公演事務局 TEL029-846-1410

★野外民族博物館リトルワールド アルゼンチンサーカス

南米大陸の2番目に大きな国アルゼンチンから9名のアーティストたちが来日。芸術的な技や空中技など想像を超えるサーカスショーです。タンゴの音色に合わせて繰り広げる、情熱と哀愁のサーカスをお楽しみください！

サーカスは入館料のみでご覧いただけます。

●公演期間 2016年9月10日(土)～2016年11月20日(日)

●公演時間 平日 11:30/14:00 土日祝 11:00/13:00/15:00 ●休演日:毎週火曜日

●会場:野外ホール ●電話:リトルワールド 0568-62-5611

その他公演情報

同封のチラシ、ふくろうじ『漂流記』とジャグリング&音楽集団ながめくらしつ『心置いて飛んでゆく』をご覧ください。